

氏名	KATRIN PAUL (カトリン パウル)		
学位の種類	博士 (芸術)		
学位記番号	甲第3号		
学位授与日	平成16年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	ウーヴェ・ヨンソン作『記念日』とクリスタ・ヴォルフ作『幼年期の構図』 に見る「写真への露出」の探求		
審査委員	主査教授	本江邦夫	
	副査教授	建畠哲	
	副査教授	諸川春樹	
	副査 東京芸術大学教授	伊藤俊治	

内容の要旨

この研究において私がこころみしたのは、写真の発明によってもたらされた新しい視覚が言語に、そしてまた文学に—作者がそれを意識するとしなにかかわらず—いかなる方法で、またいかなる程度にまで許容されてきたかを探求することであった。

ドイツ語で書かれた二冊の小説ウーヴェ・ヨンソン作『記念日』とクリスタ・ヴォルフ作『幼年期の構図』（保坂一夫訳恒文社 1981年）を用いて私が示したのは写真と文学、つまりは言語との関係であった。これらの作者はともに「物語り」のなかで写真を道具として使っているが、テキストのなかの印刷されたイメージとして写真とイメージが提示されているわけではない。写真もイメージもただ言語をつうじて現れるだけなのである。このことは写真と文学にかんして多くの問い—記憶、「現実」と「真実」の知覚、自己の映像化—を立ち上げるが、これらこそが私の研究の主題なのである。

ウーヴェ・ヨンソン『記念日』は私にとってもっとも興味深いものであり、事実、この本がきっかけとなって本論文の構想は生まれたのである。ヨンソンの言語は実に視覚的なものである。テキストのなかで視覚的なイメージと視覚化された記憶を混ぜ合わせる彼のやり方は、言語の視覚化にかんして私が感じていることに酷似している。

クリスタ・ヴォルフ『幼年期の構図』は二番目に参照する書物である。この小説は、失われた家族のアルバムにあった写真の記憶にもとづいて捏造された自伝であり、写真と文学にかんする私の主要な問いの多くのものをここに見出すことができる。

以下、論文の構成にしたがって要旨を記す。

1. 「序ならびに出発点」において、写真とのかかわりにおいて私が文学作品を採択するさいの要点ないし基準を粗描する。

- (a) 写真的なヴィジョンを言語に変換し、写真に発する用語を用いているか、テキストの構造をつうじて写真的な技法の可能性（を）模索しているテキスト。
- (b) 実在するけれどもテキストの外部にある写真が「物語ること」の引き金となり、この写真をめぐって全体の話が構築されているテキスト。ここで重要なのは、写真が物語の一部をなすことであり、写真が書かれたテキストによって読者の目に「見える」ようになることである。
- (c) 主人公が知覚と写真について考察しているテキスト。ここでは写真にかんする考察は主人公の声を通じてなされる。

2. 三つの関係にかんする考察：

(1) 写真と自伝

書かれた自己像は、それに写真的な自己像（セルフポートレート）が付随しうる場合には劇的に変化するが、それというのも、写真によって私たちが私たちを映像化するやり方が変化したからである。

ここで興味深いのは『幼年期の構図』の場合である。そこでは写真をつうじて失われた伝記と記憶をふたたび獲得する可能性が探られる。失われた記憶が、本当はたんなる想像上のものでしかない写真の使用によって蘇る。このことは写真的な自己像と書かれた自伝にかんして多くの問いを突きつける。

(2) 写真と戦後ドイツ文学

戦後ドイツの歴史的、自伝的文学ならびに小説において、写真がひじょうに重要なのは、とりわけ *Aufarbeitung von Geschichte*（歴史の処理）においてである。大戦を生き抜いた世代、とりわけホロコーストの犠牲者たちにとって、写真は証言者つまりみずからの体験の *Erinnerungsarbeit*（想起する仕事）のための真正な道具の役割を果たす。実際に起こった出来事のかわりに、写真の描写がある。そこでは承認と原告にとって、写真こそが、語られていないことを言葉にする。つまり、出来事は現実の、もしくはメタファーとしての写真をテキストに変容させることではじめて視覚化されるのである。この過程によって作られるのは、著者と歴史的な事件、読者と歴史的な出来事との（あ）いだの緩衝材である。こうして、戦後ドイツ文学においては写真は社会的な妥当性を提供するという重要な役割を担う。それは戦争責任と犯罪の問題を突きつけ、記憶を呼び起こすことで、「歴史の抑圧」もしくは「歴史の処理」のさまざまな問題へと導くのである。

(3) 写真と記憶

伝統的に記憶は視覚的なものとみなされてきた(Rugg 1997, p.22)。私たちが過去を思い出すのは視覚化によってである。幼年時代の写真による完璧な記録とともに成長した私たちはしばしば、私たちの思い出が「かつてそこに在ったこと」（ロラン・バルト）の真正な記憶なのか、それとも写真によって呼び起こされた記憶を受け取っているだけのことなのか分からなくなる。

写真が記憶の引き金となる三つの次元がある。私たちが見ている写真、見た写真（写真の記憶）、そして私たちに語られてきた写真（言語化されたイメージ）である。こうして、私たちが何かに関与したとしても、それを忘れ果て、実際は写真によってやっと思い出すといったことがありうるのである。

3. Modus Operandi (作業の手続き) と「モチーフ」という用語の説明。

私はある特定の主題の下に、記述された写真、視覚化された記憶および視覚的な言語を選択し、そうした主題のことを「モチーフ」と呼ぶ。すべてのモチーフにとって重要なのは、それらがテキストの内部において写真もしくは写真的なトピックとして現れていることである。

4. ヨンソンとヴォルフの小説の短い紹介。

5. 三つの「モチーフ」

(1) パスポート写真

パスポート写真によってぐらつく自己同一性 (アイデンティティ) の問題を扱う。ここでの私の主要な関心は、ウーヴェ・ヨンソンが主人公を登場させるのにパスポート写真を使うやり方にある。

(2) 母親の写真

このモチーフはバルトの『明るい部屋』を参照しつつ想起の道具としての写真という考え方を問題とする。というのも、この写真は想起しつつある者が生まれる以前の人物や出来事を示しているからである。

(3) 戦争のイメージ

ここで中心的に扱われるのは、小説のなかに出てくる戦争の写真である。そうした写真がテキストにいかにか合体させられているか、またそれは個々の小説にとっていかなる意味をもつかという問題意識のもとに文学的なテキストの分析が行われる。

以上見たように、写真は文学においてじつに重要な役割を果たしているのである。